

平成5年3月31日



米沢市文化財年報 No.6

米沢市教育委員会



石切山下遺跡大型住居跡（空中写真）

「一ノ坂遺跡」 調査概要

今回の調査は、第Ⅵ次調査にあたる。調査区は第Ⅰ次調査区（大型住居跡）の南東側約30m、河岸段丘の直下に位置する。平成2年度に実施した第Ⅳ次調査区南側に一部重複し、さらに同3年度調査の第Ⅴ次調査区にも重複する。調査面積は、トレンチ調査区も含め262㎡である。

調査区の遺構確認面は、第Ⅳ・Ⅴ次調査の遺構検出面の下層であり、表土下1～1.5mである。

今回の第Ⅵ次調査で検出された遺構には、竪穴住居跡5棟・土壇1基である。この竪穴住居跡は、河岸段丘に沿って緩やかな弧状をなして確認されており、5棟の住居跡のうちの4棟は30～40cmの空間を置き、極端に隣接し規則正しく構築されている。平面形は4基が長方形で、1基（HY14）だけが隅丸方形を呈している。今回の調査では5棟のうち1基（HY14）のみ完掘した。

これらの住居跡は、第Ⅴ次調査区の下層面からの検出で、地山層を掘り込んで構築しており、埋土の状況から、今回検出された住居跡は、その機能を失った直後に埋め戻され、客土を加えて整地し、住居跡群を構築したものと考えられる。今回の調査では南東側に位置す

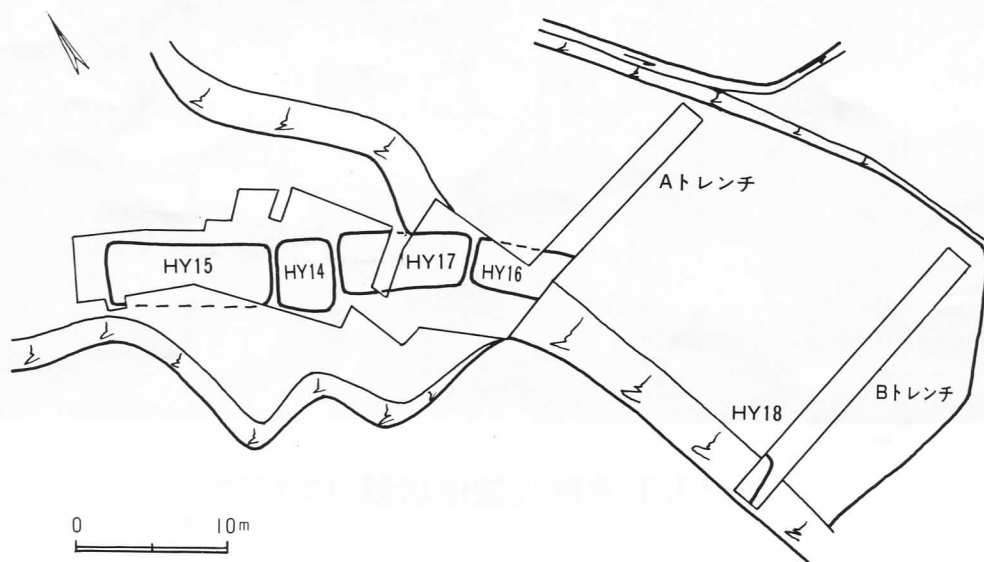
るBトレンチHY14が検出されたことや、本遺跡付近の河岸段丘は北東側に向けて馬蹄形をなしていることから想定すれば、この住居跡群は馬蹄形をなす河岸段丘直下にめぐると推定される。

遺構確認面の観察からこれらの住居跡は、同時期に機能していたと判断され、完掘したHY14等をみると、住居跡の壁が深く、柱穴も従来の竪穴住居跡と比較して大きいことから、個々の住居跡が連続するものではなく、第Ⅰ次調査で検出された単一の大型住居跡の変形と考えられる。また、



竪穴住居跡

これらの竪穴住居跡は、これまでの縄文前期初頭の遺跡からの検出例はなく、極めて特異な例である。今回の連続する竪穴住居跡は、仮称「連房型竪穴住居跡」と命名した。



一ノ坂遺跡Ⅵ次調査遺構全体図（連房型住居跡）

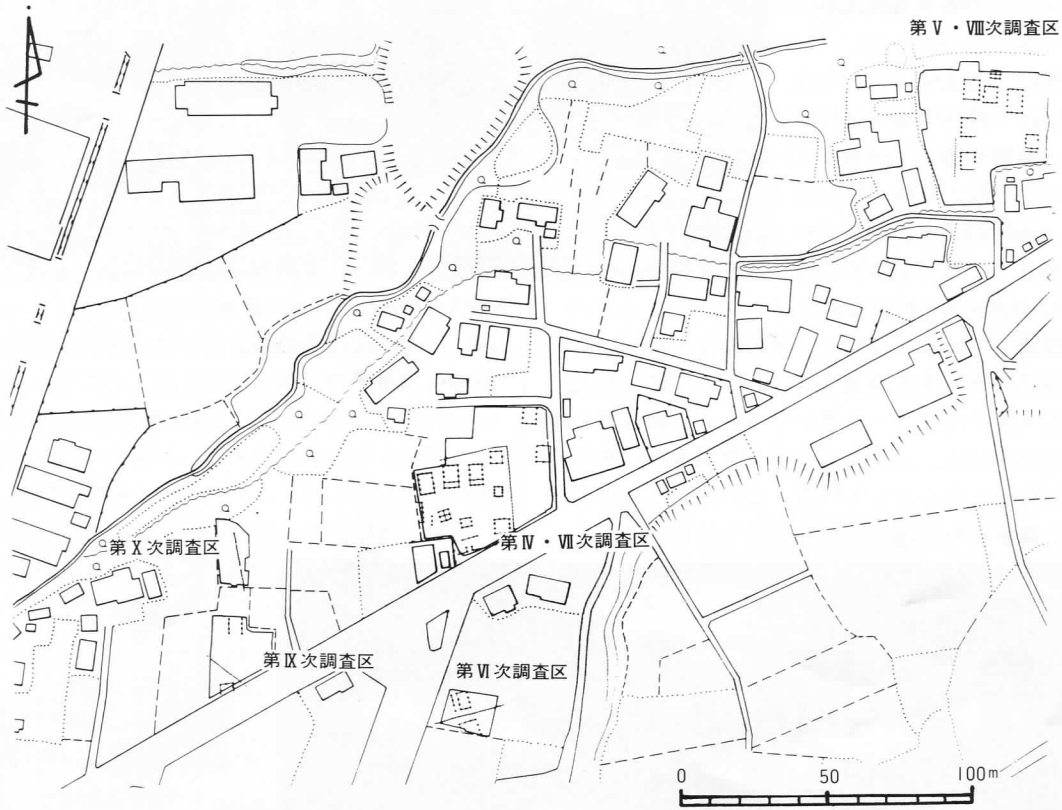
「大浦 b 遺跡」 調査概要

平成2年度から開始された大浦B遺跡に係わる国庫補助発掘調査事業は今年度をもって3カ年事業の終了を迎える。この調査によって、多くの遺構・遺物が検出され、大浦遺跡が奈良時代における律令社会研究の上で貴重な遺跡であることが確認されたといえる。3カ年の調査実績と過去9回に亘る周辺調査を加味しながら、大浦遺跡の特徴を述べたい。

大浦遺跡はこれまでの調査によって、東西約400m、南北約100m～150mの範囲に遺構が分布している。この中で注目されるのは、柵列で区画され

遺物としては須恵器、土師器、円面硯、二面硯等がある。須恵器は高台を有する坏と平底の坏があり、灯明皿に使用した痕跡であるすすの付着が多くみられた。また、他の地方から搬入したと考えられる灰釉陶器の蓋が2点出土している。土師器は内黒坏と土師器蓋類が主体である。他に、漆紙文書、布目瓦、木簡、鉄製品が遺構内から出土している。

これらの遺構、遺物から、本遺跡は2時期にわたって存在した官衙であり、その最初は8世紀中葉期で8世紀後半に建て替えを実施している。そして漆紙文書が示すように9世紀初頭で官衙の機能を失ったものといえる。山形県内の郡衙に関す



大浦遺跡官衙関連遺構図

た遺構群である。第Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ次調査区から確認されている。第Ⅳ・Ⅶ調査区は集落を強制的に移転した後に整地して、建物を構築したもので、四脚南門を有す南北39m、東西46m（推測）に区画した範囲内に21棟の掘立建物群が2期に亘って確認されている。建物は、南北長の3間×5間の大型建物3棟を北側に設置し、東西に7～8棟の小建物跡を「コ」の字状に配置したものである。

る遺跡は川西町道伝遺跡、南陽市郡山遺跡、高島町小郡山周辺遺跡、村山市郡山遺跡などがあるが、これらからは郡衙と推測される、遺構、遺物が一部検出されているのみで、大浦遺跡のように明確に建物施設が確認されていない。古代の出羽国における律令社会を研究する上で、大浦遺跡は極めて貴重な位置を占めるといえよう。

「石切山下遺跡」 調査概要

本遺跡は、広幡町成島字窪平山に位置し、石切山丘陵から東側に延びる舌状台地、標高457mに所在する。遺跡付近は、北側に三脚石器の出土量で全国的に有名な成島遺跡、南には長井、伊達、上杉の歴代領主が守護した成島八幡神社を中心とする中世の成島城館が存在する所である。

今回の調査は、米沢市が進めている「最上川・上杉の森」余暇増進ゾーン整備事業の遊具広場造成工事に伴う緊急調査である。

検出した遺構には、竪穴住居跡5棟、土壇・小ピット・風倒木等50基がある。この中で最大規模の住居跡は、長径24.6m、短径4.5mと細長く、壁は全体的に浅く約10cm前後、柱は壁柱穴で構成している。これらの住居跡は4時期に亘るものである。出土遺物には、石鏃・石筥・石匙・石錐・尖頭状石器・スクレーパー・三脚石器・磨製石斧等77点、土器は破片出土であるが、蕨状捺糸圧痕文を中心としている。この蕨状捺糸圧痕文を主体とした遺跡は東北地方でも注目される。



遺物出土状況（上新田A遺跡）

「上新田A遺跡」 調査概要

前年度は集落が構築されたシルト質の台地を調査した。住居跡はI期からIII期に分けられ、存続期間は約100年位と考えられる。6世紀から7世紀にかけて営まれた集落といえよう。今回の調査区



大型竪穴住居跡（石切山下遺跡）

は、その時期に湿地帯あるいは小規模な沼であった河原状遺構の一部を発掘したことになる。多量に検出された遺物は、出土状況から、明らかに意図的に廃棄されたものであり、戸塚山古墳と密接に関わりをもつものとみられる。

遺物は高環、埴、埴、などの供膳形態を示す器種が大半であり、祭祀集落の存在を意味するものであろう。調査地区から見ると、遠方に連なる山々、そこから昇る朝日、古墳に埋葬された人々の再来を祈って儀式が行われた場所が今回の発掘地点と考えられる。とりわけ、戸塚山古墳群の発展期に当たることから、戸塚山古墳群の解明に大きな手がかりとなるものと期待される。

指定文化財紹介

— 県 指 定 —

〈梓山獅子踊〉

指定年月日：平成4年12月1日

指定の種類：無形民俗文化財

指定物件の保存団体：梓山獅子踊保存会

指定物件の所在：米沢市万世町梓山

〔指定物件の概要〕

梓山獅子踊りには上組と下組、二つの獅子踊りが江戸時代から伝承されている。曲目や踊りに若干、違いはあるが、ともに関東文挟流の流れを汲み、もともとあった田楽系の芸能と一体化されたものが現在の獅子踊りと考えられる。上組の踊りは勇壮活発で男性的、下組は優雅で女性的なのが特色の、一人立・三頭一組の獅子踊りである。

関係古記録が相当数あり、記録に乏しい民族芸能としては特異である。中でも上組の我妻隆助翁が文政年間に書き留めた「獅子踊本記」は貴重で、由来や踊りの方法が詳細に記されている。それによると、下野国（栃木県）鹿沼在の文挟流獅子踊りが日光東照宮造営の際に地固めの奉納をし、將軍家光から「天下一」の称を賜った。のちに諸国巡行した折、伝授されたのが起源とされる。その

後一時廃れたのを我妻翁が21年もかけて習得した踊りが、今日の上組の基礎となっている。

下組については、伊達輝宗が米沢城主時代の疫病流行の際、異人がきて、春の彼岸七日の間獅子踊りをすれば災難をまぬがれ、五穀成就するとつげたのが、下組獅子踊りの発祥と伝えられている。上組の我妻翁と同じ頃の左四郎が下組の復興者で、その後の経過は上下組ともほとんど変わらない。昭和28年に宍戸勇太郎翁を中心とし再興したが、下組では29年に遠藤千代助翁が中心となり再興され、現在に至っている。

曲目は上組は「梵天舞・花吸舞・鶏徳舞」の三庭からなり、下組は「大和舞・春日舞・三笠舞」の三庭で、それぞれ30～40分の踊りである。

梓山獅子踊り保存会も作られ、7月8日の梓神社例祭（夜）に毎年、上組下組交互に踊りを奉納している。それとは別に、梓山獅子踊りは「墓獅子」であって、旧盆の15、16日に、上組は法將寺境内で、下組は松林寺で踊る。

昭和52年1月25日に、市の無形民俗文化財第1号に指定された。

その後、北海道・東北ブロック民俗芸能大会をはじめ幾多の公演実績を重ねながら、研鑽を積み、平成4年12月1日、県指定無形民俗文化財に指定された。



梓山獅子踊り「花吸舞」

平成4年度文化財保護事業

洛中洛外図複製事業

紙本金地著色洛中洛外図は、昭和28年に重要文化財に指定された六曲一双の屏風で、室町時代初期、狩野永徳の作といわれ、織田信長が上杉謙信に贈ったものと伝えられている。金箔をふんだんに使って京の都の市中と郊外の様子を生き生きと細密に描いたもので、桃山文化の担い手の一人である狩野永徳の高い技倆をうかがわせる名作として名高い。

平成元年に、上杉家から米沢市に寄贈され、市立上杉博物館の特別展で一般に公開しているが、極めて貴重な歴史資料であることから、本屏風をより良好な状態で保存するとともに、公開の機会の拡大を図るため、この屏風の複製品を製作することとなった。

製作期間は、平成3年度末から平成5年度までで、現物の製作手法に可能な限り近い工程、技法を採用している。複製手法は、コロタイプ印刷に手作業による補彩を施すもので、金箔や金泥及び岩絵具材料をふんだんに使用している。精細に、そして着々と作業が進められており、完成の日が待たれるところである。



複製作業風景

平成4年度文化財保護事業

伝統的建造物群保存対策調査事業

本市の南原地区は、上杉景勝が、会津から米沢に移封された際、城下に収容し切れない藩士を住まわせた地区で、茅葺き屋根の家屋とともに道路沿いの石垣や生け垣など、武家屋敷町としての



芳泉町の町並み景観

独特の雰囲気のある町並み景観を残している。しかしながら、近年、建物の改築や建替が進んでおり、この貴重な町並み景観を後世に伝えていくことが、当面の課題となっている。

このため、平成4年度に、国と県から補助を受け、「伝統的建造物群保存対策調査事業」を実施した。この事業は、歴史的建造物や町並み景観の現況調査をはじめ、歴史的沿革や、社会・経済概況調査も含めた広範な内容となっており、各分野の専門家9名で構成する委員会を設け、文化庁建造物課及び県文化課の指導のもと、事業を実施した。調査の対象地区は、南原地区、特に「芳泉町」を中心とし、旧武家住宅15棟の間取りや構造、屋敷配置さらに町並み景観などの調査を実施した。翌5年度も引き続き補足調査等を進め、調査報告書を取りまとめる予定となっている。

特別展「絵図でみる城下町よねざわ」

— 研究ノート —

上杉氏270年の城下町である米沢には全国でも稀にみる絵図が残っている。平成4年度の特別展はそれら絵図群のうち、まとまった城下絵図展として稀有な機会であった。

近世の米沢城下

慶長3年(1598)、蒲生氏郷に替わって上杉景勝が会津120万石に転封となった。米沢城主には重臣直江兼続が命じられ、城下の整備が始められた。

慶長6年(1601)上杉景勝は、前年の関ヶ原の戦いにおいて西軍に加担したことにより、会津120万石から米沢30万石(置賜18万石、伊達信夫12万石)に減封された。減封に伴って新参の家臣は召放されたが、旧来の家臣団は知行を3分の1に減じ、そのまま召し抱えられ、6000騎と称される大勢の家臣団が米沢と信夫地方に移った。大勢の家臣団とその家族を城下に収容できず在郷にも居住がなされた。三の丸の造営は、従来二の丸周辺にあった町人町を外濠の外、松川の河原表へ移すという城下の拡張を伴って行われた。

寛文4年(1664)、3代藩主上杉綱勝が江戸の桜田邸で急死したため、後継ぎのいない米沢藩は改易の危機に直面した。このとき綱勝の正室媛姫(既に死去)の父、会津藩主保科正之が奔走し、綱勝の甥にあたる吉良三郎に半領の15万石での相続がようやく認められた。削封によって上地となった伊達、信夫地方に居住していた家臣団が米沢に移動したことによって、御廟所周辺を中心に新たな侍町が出現することとなった。これは絵図を見ると明らかである。米沢藩が30万石から15万石に削封となったとは逆に、米沢城下は拡張したのである。

米沢城下絵図の伝来

米沢の城下絵図を最も多く収蔵するのが、市立米沢図書館の「上杉文書」である。「上杉文書」とは旧米沢藩が所蔵していた藩庁文書ともいべき近世文書群で、昭和29年に旧米沢藩主の子孫である上杉隆憲氏より寄贈されたものである。上杉隆憲氏も城下絵図や各種の絵図を所蔵している。寄贈の際、各種一点ずつ残されたものと思われる。その他、下絵、略絵図などは岩瀬家文書にも数多

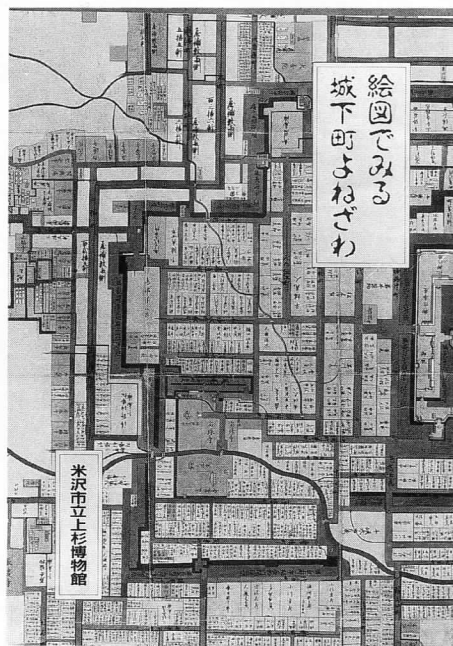
くあり、個人宅に所蔵されているものもあろう。今後の新発見を期待したい。

絵図編纂 —御用絵師 岩瀬家と目賀多家—

米沢藩の絵図編纂事業の中心となったのは、藩の御用絵師岩瀬家と目賀多家であった。岩瀬家は絵図方を勤めるとともに、藩命による情報収集活動にあたり、また政治的な能力をいかして幕府との折衝役の一人として活動するなど、藩の機密に深く関与する家であったと考えられる。他方目賀多家は二家あり、それぞれ北目賀多、南目賀多と称されていた。目賀多両家は、いずれも狩野派に入門し、絵師としての技量を磨き、法体となって絵図の作成にあっていた。さらに東照宮修復などの事業には狩野派の門人として参加した。

純粹に絵師としての役目であった目賀多家と絵図方であるとともに政治的な能力と調査能力を期待されていた岩瀬家は、それぞれ異なる才能を発揮しつつ、相互に補い合いながら、米沢藩の絵図編纂事業にあっていたといえる。

(特別展「絵図でみる城下町よねざわ」の解説図録から要約)



図録 A 4判 60頁 ¥1,300
米沢市立上杉博物館で頒布

上杉鷹山公を知りたい…

大ブーム

バブル崩壊という世相を反映して、経営学、リーダー学立場から鷹山に対する評価が高まっている。それはテレビや小説などのマスメディアとの相乗効果によって一大ブームとなった感がある。また山形県では小学校4年生の社会科副読本で上杉鷹山を取り上げており、先生方の力添えと学校の週休二日制への動きの中で、郷土の人物を知ろうと博物館を訪れる子供たちも増えている。市教育委員会文化課、市立米沢図書館、市史編纂室などの関係機関にも問い合わせが急増しているという。

上杉鷹山(1751~1822)は米沢藩九代藩主。日向国高鍋藩主秋月種美の次男。上杉家とは女

系を通じて血縁にあり、米沢藩主上杉重定の養嗣子となる。元服後治憲と名乗り、17歳で家督を相続した。良き学問の師に恵まれ有能な家臣の登用を行い、財政危機と大飢饉で動揺する米沢藩の再建に力を注いだ。米国大統領ケネディが最も尊敬する日本人と伝えられてきた。困難な現実との遭遇、自らの道徳を実践したストイックな生活信条、言行録が伝える数々のエピソードなどが人々に教訓と感動を与える。

大ブームは真実と別のところで一人歩きをはじめた感はいなめないが、感動や疑問が上杉鷹山を知る第一歩である点においては大きな意味があり、博物館はそういう人たちの拠りどころでありたい。また積極的に情報を提供していくべきと、平成5、6年度に特別展を予定している。

報告書紹介

米沢市教育委員会では、埋蔵文化財及び一般文化財を年次毎に調査し、報告書を作成しておりますので紹介します。

〈埋蔵文化財調査報告書〉

- 『普門院遺跡外3遺跡発掘調査概報』 第1集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅰ』 第2集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅱ』 第3集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅲ』 第4集 在庫なし
- 『比丘尼平遺跡調査報告書』概報 第5集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 第6集 ¥4,000
(水神前・柿の木・ニタ俣B各遺跡)
- 『笹原遺跡発掘調査報告書』 第7集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 第8集 ¥4,950
(八幡堂・ニタ俣A各遺跡)
- 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』 第9集 在庫なし
- 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』 第10集 在庫なし
- 『左沢遺跡発掘調査報告書』 第11集 ¥1,500
- 『法将寺遺跡発掘調査報告書』 第12集 ¥1,040
- 『白旗遺跡発掘調査報告書』 第13集 ¥500
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書第1・2次』 第14集 在庫なし
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書第3次』 第15集 ¥6,000
- 『石垣町遺跡発掘調査報告書』 第16集 ¥800
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 第17集 ¥3,700
(大清水遺跡)
- 『大浦A・C遺跡発掘調査報告書』 第18集 ¥1,900
- 『三の丸・生蓮寺遺跡発掘調査報告書』 第19集 ¥1,170
- 『木和田館跡第1次発掘調査報告書』 第20集 ¥400
- 『比丘尼平遺跡発掘調査報告書』 第21集 ¥950
- 『矢子大日向遺跡発掘調査報告書』 第22集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第1集 第23集 ¥2,200
- 『笹籬C遺跡第1次発掘調査報告書』 第24集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第2集 第25集 ¥1,700

- 『覚範寺第1次・第2次発掘調査報告書』 第26集 ¥1,510
 - 『遺跡詳細分布調査報告書』第3集 第27集 ¥510
 - 『遺跡詳細分布調査報告書』第4集 第28集 ¥1,540
 - 『大浦B遺跡発掘調査概報』第1集 第29集 在庫なし
 - 『一ノ坂遺跡発掘調査概報』第1集 第30集 在庫なし
 - 『寶領塚古墳第1次調査報告書』 第31集 在庫なし
 - 『遺跡詳細分布調査報告書』第5集 第32集 ¥1,540
 - 『大浦C遺跡発掘調査報告書』 第33集 ¥1,660
 - 『上新田A遺跡発掘調査報告書』 第34集 ¥1,300
 - 『一ノ坂遺跡発掘調査概報』第2集 第35集 ¥730
 - 『大浦B遺跡発掘調査報告書』 第36集 刊行予定
 - 『遺跡詳細分布調査報告書』第6集 第37集 刊行予定
 - 『一ノ坂遺跡発掘調査概報』第3集 第38集 刊行予定
 - 『上新田A遺跡発掘調査報告書』 第39集 刊行予定
- ### 〈一般文化財調査報告書〉
- 『米沢の民家』 第1集 在庫なし
 - 『米沢の仏像』 第2集 在庫なし
 - 『米沢の神社・小祠・石造物』 第3集 在庫なし

表紙の土偶について

この土偶は、米沢市八幡原No.30遺跡より出土したもので、縄文後期(約3800年前)のものです。

顔と腕の部分がこわれていますが、ふくよかな胸乳や腹部は女性をあらわしています。

県内には縄文時代の土偶がたくさん出土していますがこの時期のは少なく、縄文後期を代表するものといえてよいでしょう。

昭和56年12月17日米沢市指定文化財となる。

発行 米沢市教育委員会

〒992 米沢市金池3丁目1-55

(担当 文化課文化財係)

TEL 0238-22-5111